

成田空港周辺の加曾利 B 式土器

大 内 千 年

目 次

1. はじめに	97
2. 成田空港周辺の地理的概観	97
3. 芝山町上宿遺跡	98
4. 成田市十余三稲荷峰遺跡（旧空港No.67遺跡）	101
5. 上宿遺跡と十余三稲荷峰遺跡の比較－出土土器群の位置づけ－	103
(1) 土器様相の共通点と相違点	103
(2) 土器様相の比較	104
(3) 時間的な位置づけについて	105
6. 東関東における加曽利B 1式と加曽利B 2式の間－覚え書き－	106
7. おわりに	108

1. はじめに

縄紋時代後期中葉の研究において、成田国際空港（以下成田空港と略す）周辺の地域は、当該期の貝塚などのいわゆる「大規模遺跡」がないことから、これまで研究の俎上にはほとんどなかった地域である。しかし、遺物量はそれほど多くないものの、地点的にまとまりを持つ資料がいくつか存在する。

近年報告された芝山町上宿遺跡や、現在整理作業中の成田市十余三稲荷峰遺跡（旧空港No.67遺跡）では、出土量そのものはそれほど多くはないものの、加曾利B式前半の比較的まとまった資料が出土しており、東関東における加曾利B2式の成立を考える上で重要な資料と考え得る。ただし、これらの資料はややもすると、この地域で多量に出土する旧石器時代や縄紋時代早期の遺物の陰に隠れ、見落とされがちな資料と言える。これらについて、あらためて資料提示をおこない、編年的な問題についての若干の考察を加え、その資料的な重要性を再認識したい。

2. 成田空港周辺の地理的概観

成田空港は、下総台地の北東部、現在の行政区分では成田市の西部で、大栄町、多古町、芝山町との市町村境が接するあたりに位置する。印旛郡、香取郡、山武郡の郡境でもあり、利根川下流域・印旛沼地域・九十九里沿岸地域を分かť分水界上にあたる（第1図）。利根川水系の根古名川とその支流、九十九里平野を経て太平洋に注ぐ栗山川の支流である高谷川及び木戸川の源流部となっており、やや南側には印



成田空港の位置

(右図)

1. 芝山町上宿遺跡
2. 成田市十余三稲荷峰遺跡（旧空港No.67遺跡）

※国土地理院発行1/50,000地形図「成田」を使用



第1図 成田空港と遺跡の位置

旛沼水系の鹿島川の支流である高崎川の最上流部が迫る。

考古学的には、成田空港の建設とこれに関連した開発に伴い、多くの遺跡の埋蔵文化財調査がおこなわれ、旧石器時代と縄紋時代早期の資料で注目される場合が多い。『三里塚』や『木の根』といった報告書は、すでに古典的な報告書であろう⁽¹⁾。

一方、縄紋時代後期中葉という点では、これまで注目される地域ではなかった。少なくとも第1図の右に示した範囲内には、遺物の散布はあるものの、縄紋時代後期中葉に関わるいわゆる大規模な遺跡は存在しない。周囲には、縄紋時代後期の貝塚を伴う大規模な集落と目される遺跡を含む地域として、印旛沼南岸域、利根川下流域、栗山川流域があるが、これらの地域からはそれぞれほぼ等間隔で離れていると言って良からう。最も近辺に存在する後期中葉に関わる主要な遺跡としては、根古名川を下った位置に存在する荒海貝塚や、高谷川をやや下った位置にある多古町・芝山町境貝塚や芝山町居合台貝塚などとなる。

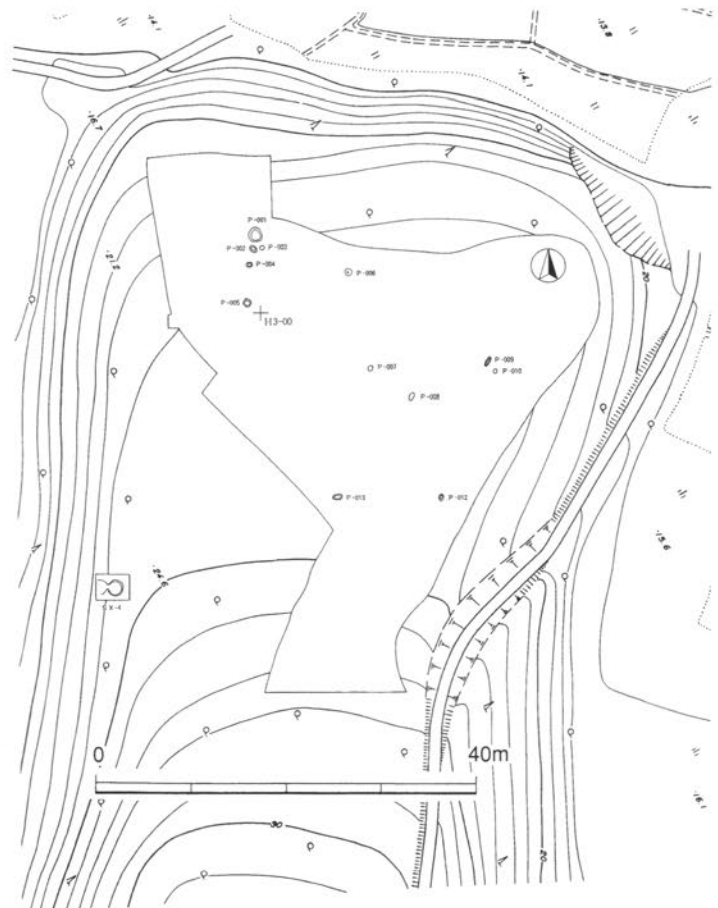
今回扱う芝山町上宿遺跡と成田市十余三稻荷峰遺跡の二つの遺跡は、それぞれ異なった水系の最上流部に存在し、成田空港を挟んで南北に対峙するような位置にある。住居跡などの主要な遺構は検出されておらず、全体としての遺物の出土量も少ない。後期中葉の遺跡としては「小規模遺跡」として評価されるものであろう。ただし、後述するように出土した土器の内容は注目に値し、遺跡の立地という点からも興味深い遺跡と考える。

3. 芝山町上宿遺跡

上宿遺跡は山武郡芝山町岩山字上宿に所在する遺跡である。成田空港の南側に位置し、現在、主要地方道成田松尾線と国道296号線の交差点となっている部分が、この遺跡に当たる（第1図1）。九十九里平野を経て太平洋に注ぐ栗山川の支流、高谷川の最上流部に位置する。台地上の標高は約42mある。十余三稻荷峰遺跡からは、成田空港を挟んでほぼ真南の位置関係となる。

昭和58年（1983年）度以降、空港南部工業団地の開発に伴う埋蔵文化財調査として、断続的に調査が続けられている。平成10年（1998年）度までの調査成果が、報告書にまとめられている⁽²⁾。

遺跡範囲の北東端に当たる、狭い舌状台地の先端部であるA地区（第2図）で、加曾利B式がややまとまって出土している。



第2図 上宿遺跡A地区

A地区で検出された縄紋時代の遺構は陥し穴1基のみで、他には縄紋時代の可能性もある土坑・ピットが3基のほか、時期不明の掘り込みが少数存在するのみで、加曽利B式と考え得る遺構らしい遺構は全くない。遺物のみが出土し、いわゆる「包含層」といった出土状態である。

出土した土器は、早期以降晩期にいたるまで少数ずつ出土しているが、加曽利B式は報告書では「第IV群」とされ、「本遺跡の主体的な時期」とされた。報告によると加曽利B式に属する資料は約1,250点とのことである。出土数を示した図（報告書第37図・第38図）によれば、調査区全体に散漫に出土したように見えるが、惜しむらくは土器の出土位置を示すデータが提示されていないため、個々の土器がどのような出土状況であったのかは、よくわからない。

第3図に、上宿遺跡で出土した加曽利B式のうち、復元された個体を中心にまとめた。土器の番号に付けた（ ）内の番号は、報告書における遺物番号である。以下に簡単に概略を説明したい。

1は口縁部付近のみ残存する土器である。3単位の波状口縁で、口頸部の文様帯には入組文を持つ。図でははっきりしないが、報告書の写真を見る限り深鉢の可能性はある。

2～4は帯状縄紋を持つ精製の鉢形土器である。いずれも帯状縄紋はやや幅広で、あまり多段化しない。2の区切り文は、対弧文と、その下部に対弧文に似たU字状の文様を配する。3は体部下半で、4は対弧文による区切り文を持つ。

5は深鉢の体部で、頸部がくびれやや胴部が張る器形であろう。破片の向きが上下逆かも知れない。体部のややふくらむ部分に、上下に対向する横位の弧線文が存在する。区切り文は、帯状縄紋の部分は対弧文で、横位の弧線文間の菱形の部分にはS字状の蛇行する沈線が配されるようである。

6はやや風変わりな土器で、若干くびれを持ち、外反する口縁部の深鉢である。地紋に縄紋を施し、幅広の口縁部の下端を沈線で区画する。体部には涙滴状の区画をおこない、その中を磨り消している。

7、8はよく似た土器であり、つよいくびれを持つ深鉢である。地紋に縄紋を持ち、体部には沈線を横走させ、帯状縄紋に似せた文様を描く。7は区切り文が対弧文で、横走する沈線が若干下向きの弧線状になっていることが注意される。8は区切り文が蛇行沈線となる。

9、10も地紋縄紋を持つ深鉢であろう。口縁部を画する横位の沈線が観察できるが、詳細は不明である。

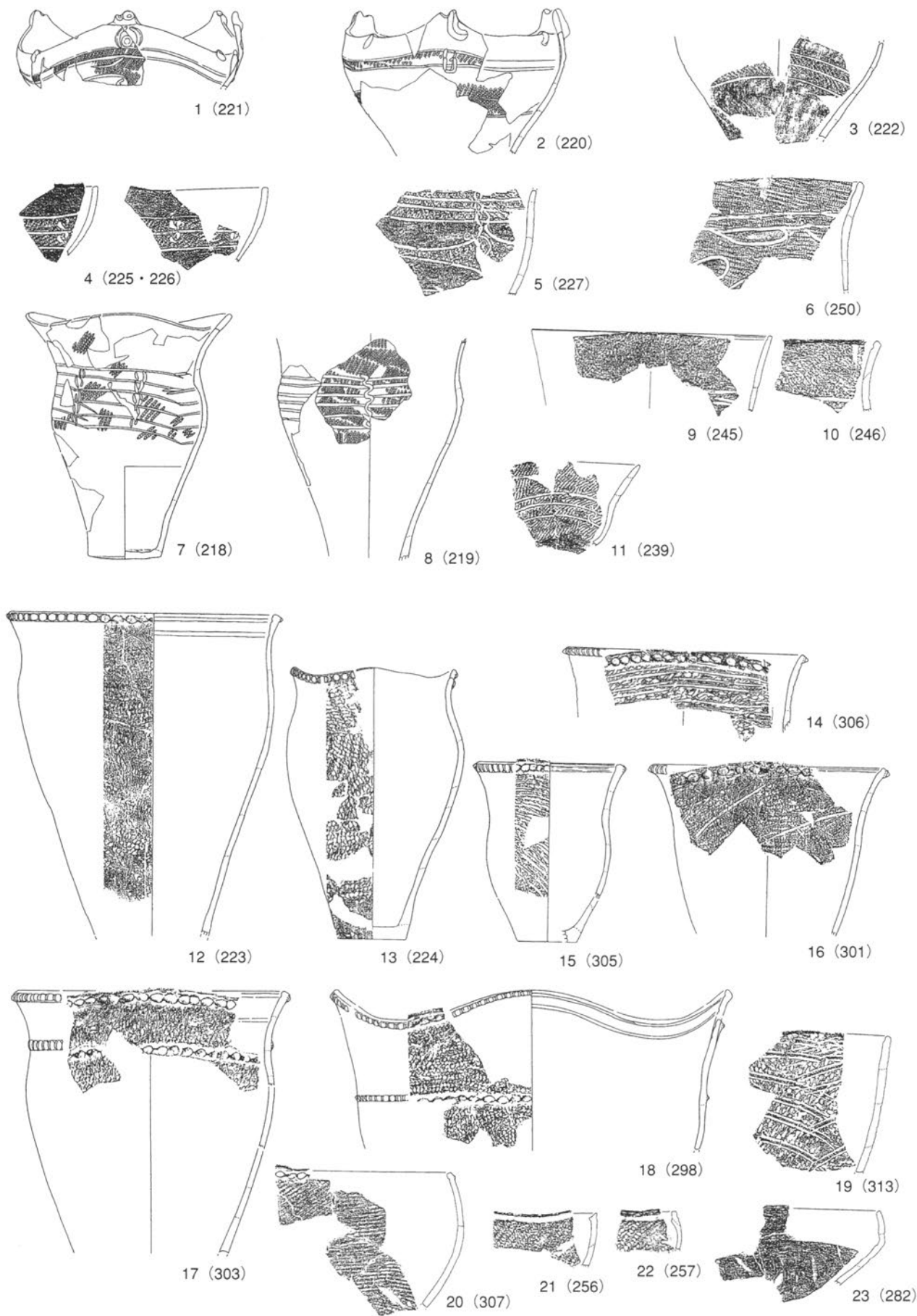
11は地紋縄紋を持つ鉢形土器で、体部には横走する沈線で帯状縄紋に似せた文様を描く。区切り文は縦位のS字状の沈線が入り組むものようである。

12～22は粗製深鉢である。12～16はくびれを持つ器形で口縁端部に紐線文を1条持つ。12、13は地紋縄紋のみで、14、15は条線文、16はまばらな斜沈線を持つ。17、18はやはりくびれを持つ器形で、口縁端部に加え、頸部にも紐線文を持つものである。両者とも地紋縄紋のみ持つものである。19は紐線を欠くもので、地紋縄紋上に竹管の腹を用いた沈線を引く。

20～22は球胴状に張る器形のものである。20は口縁部に紐線を持つものである。21は口唇上に沈線を引くもの、22は口縁端部に1条の沈線を持つものである。

23は無紋の大型の浅鉢である。

以上の土器群を簡単にまとめると、精製土器として、いわゆる西部関東系の3単位波状口縁深鉢の可能性のあるもの（1）と幅広の帯状縄紋を持つ鉢（3～4）があり、これに主に東部関東に主体があると考え得る地紋縄紋系の土器群（5～11）が加わる。粗製土器としては、紐線文系粗製深鉢はくびれを持つものが多数で、くびれ部に紐線を持つものと持たないものがある。斜沈線が引かれるものはそれほど目立た



第3図 上宿遺跡出土の加曾利B式 (約1/6)

ない。また他に、球胴状を呈する深鉢がある。さらに大型の無紋の浅鉢がある。

山内清男の示した標式資料である『日本先史土器図譜』⁽³⁾に照らした場合、少なくとも精製土器の様相では「加曾利B式（古い部分）」として示されたものとは異なり、かつ、「加曾利B式（中位の古さ）」の大きな特徴である斜線文土器を含まないまとまりである、とひとまず評価できよう。

4. 成田市十余三稻荷峰遺跡（旧空港No.67遺跡）

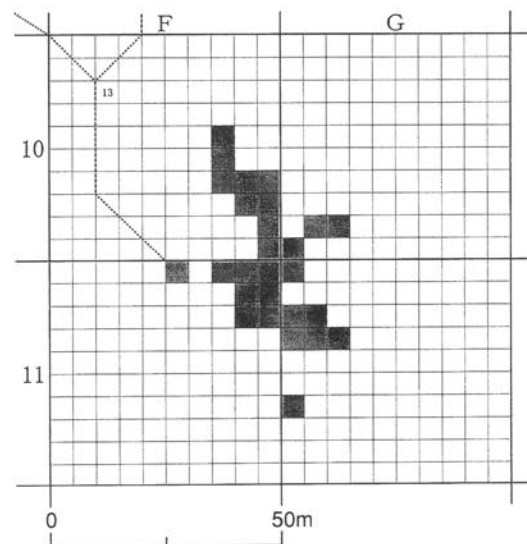
十余三稻荷峰遺跡は、成田市十余三稻荷峰に所在する遺跡である（第1図2）。現在の成田空港暫定平行滑走路の北西端に当たる。利根川水系の根古名川の支流、取香川に開析された谷津の最奥部に位置する。台地上の標高は約40mである。上宿遺跡からは成田空港を挟んで、北側に当たる。

成田空港関連の調査であり、（財）千葉県文化財センターにおいて整理作業が続けられている。遺跡から出土した遺物の主体は、旧石器時代と縄紋時代早・前期のものであり、縄紋時代中期以降の遺物も若干出土している。筆者は、平成12年（2003年）度、1か月間整理作業を担当し、縄紋時代後・晩期の土器の整理をおこなった。ここで示す資料はこのときに図化したものである。未だ正式報告前の資料であり、報告書が刊行され、事実記載に齟齬があった場合には、報告書が優先するものであることをお断りしておく。

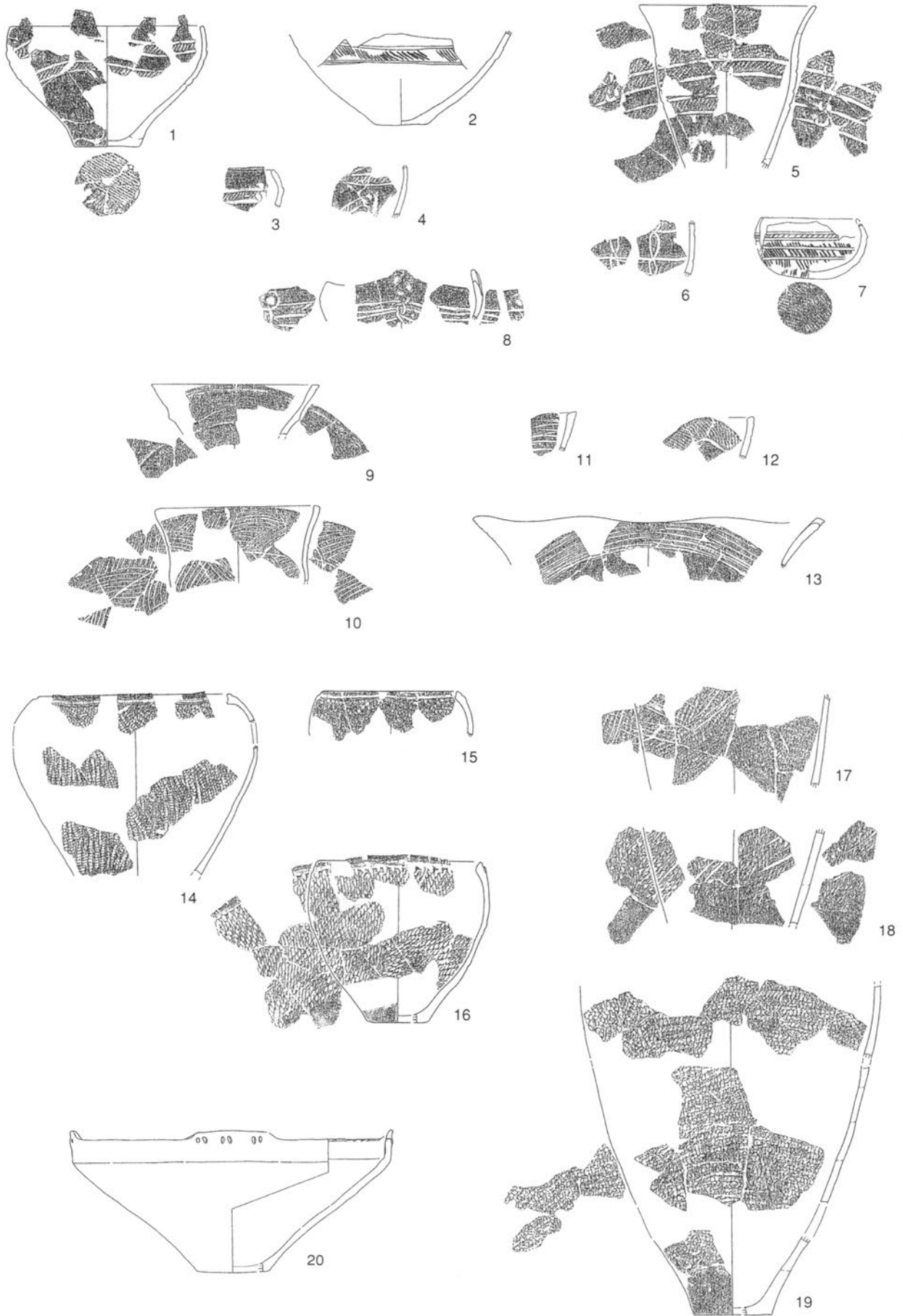
十余三稻荷峰遺跡から出土した縄紋時代後・晩期の土器は、後期前葉から晩期中葉までの土器が少量ずつ存在した。その中で、加曾利B式は量的にやや多く、出土位置が地点的に比較的にまとまる資料が存在することがわかった。第5図に示した土器は、加曾利B式のうち、地点的に比較的にまとまるものを抽出したものである。土器は、50m大グリッドのうち10F、10G、11F、11Gの4つのグリッドから出土しており、5m小グリッドの位置から見ると、この4つの大グリッドの境界付近に集中することがわかった。第4図は土器が出土した小グリッドを模式的に示したものである。13の土器がやや離れた地点の土器と接合する以外は、約65m×40mの範囲内で土器が出土し、この中で接合関係を持つ。

第5図は、この地点から出土した土器のうち、図上で復元可能であった土器を中心にまとめたものである。1、2は幅広の帯状縄紋をもつ精製の鉢形土器である。1は残存部分が少なく、明瞭に復元できなかったが、波状口縁となり、帯状縄紋もこれに沿って波状を呈するようである。3も精製の鉢形土器の口縁部であろう。4は磨消縄紋による単位文をもつ土器の胴部破片である。

5はいわゆる「中妻系列」⁽⁴⁾の深鉢である。弱く屈曲する器形で、口縁部に幅広の縄紋帯をもち、体部に帯状縄紋を配す。胴部のふくらんだ部分に無紋帯をもつ。区切り文は、対弧文に近いが、下端が閉じており、U字状となっている。6は幅広の帯状縄紋を持つ深鉢のようで、区切り文は連鎖状になっている。7は口縁部に無紋帯を持ち、体部は地紋縄紋上に横位の沈線を引く。



第4図 十余三稻荷峰遺跡加曾利B式出土グリッド



第5図 十余三稻荷峰遺跡出土の加曾利B式 (約1/6)

8は、緩い波状口縁の深鉢乃至鉢で、口縁部に無紋帯を持ち、波頂部には低いS字状の貼り付け、波底部には円形の貼り付けをおこなう。区切り文は弧線文と弧状の単沈線が組み合わされ、連鎖状になるようである。口縁下には帯状縄紋に似せた、横位の沈線による文様が描かれるが、沈線は区切り文間を繋ぐように、やや彎曲して引かれる。

9～13は加曾利B2式の基準資料といっても良い、遠部包蔵地の報告⁽⁵⁾の中に類似例を見出せるものである。9、10、11、13は沈線を主文様とするもので、「遠部第二類」に類似するものである。9は平縁の深鉢で、外に開く無紋の口縁部を持ち、無紋部の下に段をつけ、以下に沈線による文様を描く。文様は、菅谷通保が「パッチワーク状の施紋技法」⁽⁶⁾、林田利之が「鋸歯状条線紋」⁽⁷⁾と呼ぶ文様が描かれる。10は頸部がくびれる平縁の深鉢で、口縁部から9と同じ手法の沈線文様を2段に重畳する。11と13は同様の文様をもつもので、口縁部に平行線に近い形のやや短い沈線を重ねる。12は波頂部が緩く彎曲する口縁部の一部で、口縁部に幅広の縄紋帯を持つものである。「遠部第五類」に類するものであろう。

14～19は粗製深鉢である。14～16は球胴状の器形をもつものである。14は口唇上に沈線をもつもので、15は口縁部に1条の沈線をもつものである。16は口縁部に1条の沈線と、この沈線に沿って、縦位の単沈線をキザミ状に巡らす。

17～19はおそらくは紐線文系の粗製深鉢と思うが、いずれも残念ながら口縁部から頸部を欠く。17、18は地紋縄紋上に斜沈線を引く。19は地紋縄紋のみである。

20は大型の浅鉢である。口縁部には、幅広の突起状の張り出しを持つ。この部分に、区切り文で用いられるような対弧文が配されている。

以上の土器群を簡単にまとめると、精製土器として、幅広の帯状縄紋を持つ鉢（1、2）、地紋縄紋の土器（5～7）、さらに遠部包含地の土器に類した土器群（9～13）がある。粗製土器として、球胴状の深鉢がある。紐線文系粗製深鉢ははっきりしない。大型のほぼ無紋の浅鉢が存在する。

『先史土器図譜』に照らせば、「加曾利B式（古い部分）」とは異なる縄紋施文の土器に、「加曾利B式（中位の古さ）」の特徴である斜線文の土器を若干含むまとまりである、ととりあえず評価できよう。

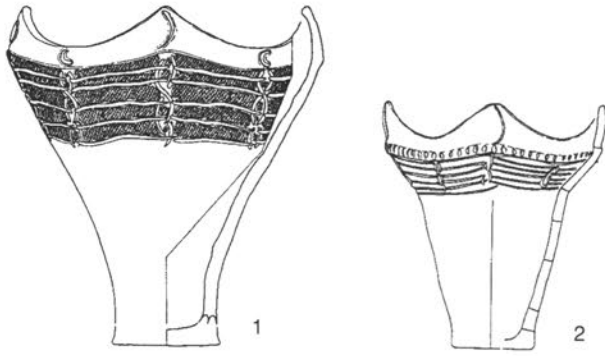
5. 上宿遺跡と十余三稻荷峰遺跡の比較－出土土器群の位置づけ－

（1）土器様相の共通点と相違点

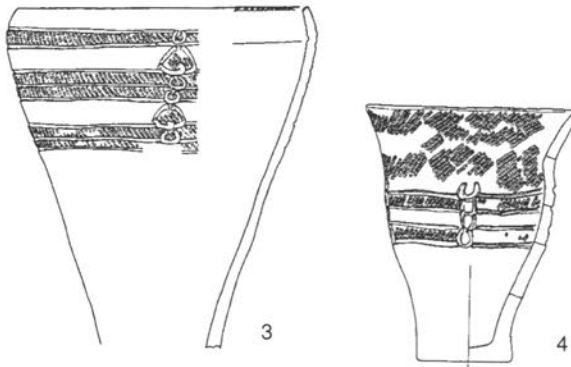
上宿遺跡と十余三稻荷峰遺跡で出土した加曾利B式について略述したが、両遺跡出土の土器について簡単に共通点と相違点をまとめてみたい。

まず、大きな相違点として、組成という点で、加曾利B2式の確実な指標となる斜線文土器が上宿遺跡では出土しておらず、十余三稻荷峰遺跡では出土していることが挙げられよう。すなわち、十余三稻荷峰遺跡の第5図9～13は遠部包含地の第二類及び第五類中に類例のあるもので、上宿遺跡には存在しない。ただし、少なくとも第5図9、10については、加曾利B2式斜線文土器の中での相対的な新古という点では、それほど新しい方には振れないのではないかという感触を持っている⁽⁸⁾。

また、上宿遺跡には3単位波状口縁深鉢の可能性のあるもの（第3図1）が存在するが、十余三稻荷峰遺跡には明瞭な例は存在しない。ただし、第5図4は、体部に磨消縄紋による単位文を持つもので、類似



「小山台型深鉢」の系譜



「U字形」区切り文の類例

第6図 関連資料

1. 茨城県小山台貝塚, 2~4. 茨城県中妻貝塚

した土器の可能性はある。

一方、十余三稻荷峰遺跡第5図8は上宿遺跡には存在しないものである。この土器は鉢の可能性もあるが、径の大きさなどから深鉢と判断した。この土器は、茨城県中妻貝塚に類例と考え得る土器がある（第6図2）⁽⁹⁾。系譜的には茨城県小山台貝塚出土の土器⁽¹⁰⁾から繋がるものと考えている（第6図1）。これらの土器は仮に「小山台型深鉢」と呼ぶこととし、注意しておきたい。区切り文間を繋ぐ沈線が弧状になることが特徴の一つで、加曾利B2式斜線文土器の成立に関わる一要素として顧慮するべきかもしれない。上宿遺跡第3図7が同様の沈線を持ち、関連性が窺われる。

共通点としては、地紋縄紋系の土器が一定程度存在する点、紐線文系粗製深鉢の様相、球胴状を呈する粗製土器の存在、大型のあまり文様を持たない浅鉢の存在が挙げられよう。

両遺跡出土土器は、組成という点では若干違いがあるものの、全体的としては共通した様相が多く認められるのではないかと思う。

(2) 土器様相の比較

比較可能な土器についてもう少し細かく見ていきたい。

幅広の帯状縄紋を持つ鉢の様相は、文様の全体が窺える資料がないため、詳細には語れないが、第3図2と第5図1、2は帯状縄紋の幅や、帯状縄紋が多段化しない点などに共通点がある。一方、上宿遺跡第3図3、4は帯状縄紋の幅が広いが、2段になっており、十余三稻荷峰遺跡にはこうした鉢は存在しない。第3図5と第5図6は、おそらく体部に磨消縄紋による文様を持つ深鉢であるが、いずれも小片であり、詳細は不明である。

地紋に縄紋を持つ土器としては、口縁部に幅広の縄紋帯を持つという点で、上宿遺跡第3図6~10と十余三稻荷峰遺跡第5図5が対比できよう。第3図6~10の土器は細かく見れば様相の異なる土器であるが、第5図5と比較した場合、帯状縄紋間の磨消消し帯を持たないことで共通する。第5図5はいわゆる「中妻系列」⁽⁴⁾の深鉢の典型例に近いものであるが、これとの相違を認めることができる。

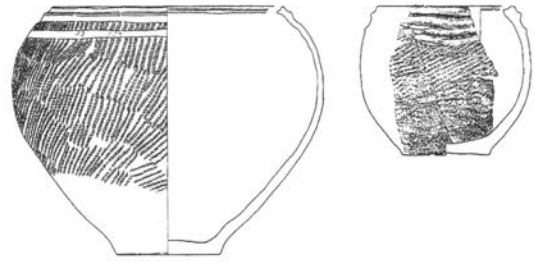
第3図11と第5図7は地紋縄紋系の鉢であるが、系譜が明らかに異なるようである。第3図11は大塚達朗が加曾利B1式「鬼越型土器」として注意するものに近く⁽¹¹⁾、区切り文の差異により、鬼越例よりは新しい様相に見えるが、加曾利B1式との繋がりが感じられる土器である。

以上の土器群に見られる区切り文として、対弧文（第3図4、5、7・第5図3）、沈線を組み合わせ

た入り組み弧線文とこれに類似するもの（第3図5，11・第5図6，8），蛇行沈線（第3図8）があり，概ね共通する。特徴的なものとして沈線をU字状にするものがあり，第3図2と第5図5に見出せる。この手法は中妻貝塚出土土器の中にも見出せるものである（第6図3，4）。

粗製土器については，上宿遺跡第3図12～18，十余三稻荷峰遺跡第5図17～19が紐線文系粗製深鉢である。上宿遺跡では，強弱はあるがすべてくびれを持つもので，頸部に紐線を持つものと持たないものがある。器面に施される沈線は持つものと持たないものがあり，それほど顕著ではないようである。十余三稻荷峰遺跡では，遺存状態の関係であまり明瞭ではないが，やはり器面に施される沈線は顕著でない。

球胴状を呈する深鉢は，上宿遺跡第3図20～22と十余三稻荷峰第5図14～16で，上宿遺跡にのみ紐線文を持つものが存在する（第3図20）。口唇上に1条の沈線を持つものと口縁部に1条の沈線を持つものは，両遺跡で共通する。口縁部の沈線下にキザミ状の単沈線を配すものが十余三稻荷峰遺跡には存在する（第5図16）。こうした土器は器形的には，茨城県上高津貝塚A地点XVI 2層でまとまって出土した⁽¹²⁾，鈴木正博が「微隆帯文土器」と呼ぶ土器⁽¹³⁾の系譜を引くと考えられる（第7図）。上高津貝塚の事例は，堀之内2式最終末と見え得る土器群と同一層でまとまって出土したものであるが，これらは口縁部に隆線を持つ。これらと比較すると，上宿遺跡・十余三稻荷峰遺跡例は，隆線上加飾がなされたり，隆線が省略され，あるいは沈線に置き換わったりしていると思なすことができ，より後出的な要素が存在すると思なし得ると考える。



第7図 上高津貝塚出土の「微隆帯文土器」

（3）時間的な位置づけについて

両遺跡の土器群の様相は，ある程度の時間幅を持つものの近接した時期と把握できそうである。各遺跡の説明でも述べたとおり，両遺跡の土器は，標式資料である『先史土器図譜』に照らした場合，「加曾利B式の古い部分」の土器とは異なり，「加曾利B式中位の古さ」の土器を含まない上宿遺跡と，これを含む十余三稻荷峰遺跡と言えた。大まかな位置づけとしては加曾利B1式以降で，斜線文土器に代表される加曾利B2式との間に位置づけられる土器群と考える。

菅谷は『先史土器図譜』で示された「加曾利B式（古い部分）」と「加曾利B式（中位の古さ）」の間に「地域的にも時間的にも断絶の存在することは確認できた」⁽⁶⁾とし，西関東的な3単位波状口縁土器が成立しているが，「加曾利B式（中位の古さ）」の特徴である，斜線文土器を含まない時期が存在することを指摘した。

出土事例としては，古作貝塚2号Pitの事例⁽¹⁴⁾に代表されるが，筆者がかつて携わった，上高津貝塚A地点の，斜線文土器を含むIX層と，3単位波状口縁土器が存在するものの斜線文土器を含まないX層，

という層位的な出土事例⁽¹²⁾も、こうした事情を反映するものと考えている。少なくとも、東関東においては、遠部包含地に代表される斜線文土器が主体となる時期以前に、「加曽利B式（古い部分）」とは異なった様相の土器が主体となる時期が存在するようである。上宿遺跡と十余三稲荷峰遺跡の土器群も、こうした様相を示す一つの事例と考える。おそらく、東関東における、加曽利B 2式斜線文土器成立前後の様相を、この二つの土器群は示しているのではないかと想像している。

それぞれの遺跡の土器群の比較からは、共通性が多いものの、斜線文土器の有無や、型式学的な特徴などから、上宿遺跡よりも十余三稲荷峰遺跡の方が、若干新しい様相を持つ可能性があることが想像できる。ここでは、それぞれ「上宿出土事例」、「十余三稲荷峰出土事例」と仮に把握しておき、土器群の時間的な位置づけは概ね重なるが、十余三稲荷峰遺跡の方が若干新しい時間幅までを含む、と捉えておきたい。

ここで、注意しておきたいのは、この二つの遺跡の土器群を出土状況の一括性を前提とした、いわゆる「一括資料」として強調したいわけではない。両遺跡とも、オープンサイトで、遺構に伴わず出土している資料であり、一括性の保証はない。少なくとも出土状況を前提に同時性を語ることはできない。

ただし、「小規模遺跡」ゆえに、土器の出土量が少なく、土器群の様相は見やすい。また、それほど広くない範囲で、似たような土器がある程度の量が出土している、という点では、時間的な継続性が感じられる。最終的には、筆者の判断として、概ね近接した時間的位置に位置づけられそうな土器群と判断した、ということである。

こうした「小規模遺跡」出土の土器群を、型式学的な検討と他遺跡の出土事例との比較を通じて、考古学的に同時期と見なすべきなのか、あるいは相対的な時間差を考え何時期かの変遷を想定した方がよいのかを、決定していくべきであると考ええる。そうした判断の上で、一括性が認められる資料であるかどうかは再度判定されるべきであろう。

6. 東関東における加曽利B 1式と加曽利B 2式の間－覚え書き－

加曽利B式の標式資料である『先史土器図譜』⁽³⁾で示された「加曽利B式（古い部分）」と「加曽利B式（中位の古さ）」の精製土器の様相に、大きな差異があり、このことが加曽利B 1式と加曽利B 2式の理解を困難にしていることは、これまでの加曽利B式土器の研究の中で何度も指摘されてきた。

鈴木正博はこの標式資料間の断絶を埋めるため、『先史土器図譜』の「加曽利B式（古い部分）」の一部と、西関東的な3単位波状口縁土器について、「加曽利B 1－2式」と認定し、加曽利B 1式と加曽利B 2式との間に中間型式を設定した⁽¹⁵⁾。

「加曽利B 1－2式」に対しては、大塚達朗による強い批判があり⁽¹⁶⁾、1996年の縄文セミナーではこの大塚の立場に沿った形で資料集成がなされたようである⁽¹⁷⁾。

しかし近年、鈴木は「加曽利B 1－2式」を補強する新たな論考を発表し⁽¹⁸⁾、大塚は縄文セミナーを総括する形で、「加曽利B 1－2式」を再び強く批判している⁽¹¹⁾。また近年蓼沼香未由は、「加曽利B式（中位の古さ）」を加曽利B 2式とする前提で、入り組み文、弧線文を持つ土器について変遷を追い、これらの土器の多くを、加曽利B 1式と「加曽利B 1式とB 2式の移行期」に位置づける独自の編年案を示している⁽¹⁹⁾。加曽利B 1式と加曽利B 2式の間に位置する同じ土器に対して、別の型式名を持って呼ぶ、

という状態は、80年代以降あまり変わらないと言よう。前節で「上宿出土事例」,「十余三稲荷峰出土事例」呼んだものは、今見てきた研究史の中で、問題になっていた部分と関わる。B 2式と呼ぶかB 1-2式なのか、おそらく意見が分かれるであろうし、意見の一致を見ることはおそらく今後も無いであろう。

菅谷が示したように⁽⁶⁾、少なくとも、東関東においては、遠部包含地に代表される斜線文土器が主体となる時期以前に、「加曾利B式(古い部分)」とは異なった様相の土器が主体となる時期が存在し、遠部包含地に代表される斜線文土器の成立と、西部関東の3単位波状口縁土器の成立に時期的なズレがある。この時間幅をどのように把握するかで、各研究者間の相違があるように思える。

誤解を恐れずに言うならば、筆者自身は、「上宿出土事例」や「十余三稲荷峰事例」の土器が加曾利B 1式に相当するのか、加曾利B 2式に相当するのか、あるいは別型式に相当するのかを確定することに、それほど興味はない。型式区分が可能な場合もあれば、そうでない場合もあろう。山内が示した標式資料は、山内の考える土器型式の「典型例」を示したものであり、それ故に「標式」なのであろう。土器は人工物ゆえに、「標式」間に中間的な様相のものが多数存在することは容易に想像できるし、実際に存在する。こうしたものを山内は極力廃して型式を設定しているのである。

「標式資料」間の中間的な土器については、中期「中峠式」の扱いなどを通じて勉強を重ねている⁽²⁰⁾が、特に「典型的」な土器型式が変容する際には、極めて多様な土器群が生み出され、山内的な「土器型式」に当てはまらない場合が存在するようである。加曾利B 1式と加曾利B 2式の間にも、こうした問題が存在するのではなかろうか。型式区分がそぐわない場合もあり得るのではないか。

型式区分を優先するか、時期区分を優先するかは、中期の土器研究では古くから問題となっていたようであるが⁽²¹⁾、加曾利B式の変遷に関してはこれまで型式区分優先の研究がおこなわれて来たように思う。加曾利B式に関しては、土器の系譜や文様の変遷などについて、これまで極めて精緻な前後関係が想定されている。また、文様施文方法による、土器製作集団の想定といった研究成果も存在する⁽⁷⁾。こうした研究が重要なのは言うまでもなく、その方向性を否定するものではない。

しかし、後期中葉の集落や貝塚、「環状盛土遺構」を分析するツールとして、使いやすい時期区分は存在するかと問われると、明確に答えづらい。筆者は先だって、三輪野山貝塚の「盛土型環状貝塚」を分析する過程で、時期ごとに遺跡の状況を把握する必要性に触れた⁽²²⁾。これは、後～晩期の「拠点集落」と呼ばれるような遺跡が、後期から晩期を通じて、「拠点」として同じ意味を持っていたという論点に対し、疑問を呈したわけであるが、こうした点を検証するためには、時期区分に沿った遺跡の状況を明らかにし、遺跡が間断なく継続していたのか、あるいは断続したものなのか、また時期ごとの遺跡の規模や性格を判断しなければならぬ。そうした分析の際には、特定の土器だけに頼る時期区分では、遺構や層序などの限られた出土状況に対応できない場合もある。粗製土器を含めた同時期の土器群のセットの序列としての時期区分が有効のように思う。

個々の土器や文様の変遷から画期を捉え、それを重ねていく作業と同時に、層位的な出土状況からセット関係を把握する作業が必要であり、そうした作業は後期中葉に関してはこれまで十分にはおこなわれていないように思う。そうした作業を経た上で、集落や環状盛土を紐解くために利用可能な、リーズナブルな時期区分を模索する必要があるのではないかと考えている。

型式学的な土器の検討と、堅穴住居跡出土遺物に代表される層位的な出土事例とは車の両輪であることは言うまでもない。意識的にしろ無意識にしろ、土器の出土状況を前提とし土器の変遷は想定され、

型式学的な序列は出土状況によって検証される。しかし、加曽利B式土器に関しては、良好な竪穴住居跡出土資料の検出事例そのものがそれほど多くなく、掘り込みが検出されない炉とピットだけの住居も多い。特に「大規模遺跡」では顕著であるが、重複が激しい場合も多く、一軒の住居として捉えられた場合でも、多くの場合は複数の型式を含む、かなりの時間幅を持った土器群が出土する場合がほとんどで、廃棄の同時性を窺えるような「一括資料」が少ない。

今回扱ったような「小規模遺跡」といわれる遺跡出土の土器が、そうした状況を補完する、とまでは言えないものの、検討に値することは間違いなからう。少なくとも、今後、加曽利B式の層位的一括資料が劇的に増える、という状況は考えにくい⁽²³⁾。こうした「小規模遺跡」の事例を再検証していく必要性があるであろう。

7. おわりに

上宿遺跡と十余三稲荷峰遺跡という二つの「小規模遺跡」出土資料を紹介し、その時間的位置づけについて若干述べた。また、後期中葉の時期区分の際に、「小規模遺跡」の資料をより重視する必要があることを述べた。

その際、出土状況としては一緒に出土した、「小規模遺跡」の資料が、考古学的に（ある幅を持つにして）1時期と認識できるのか、複数の時期にわたるものなのかを様々な方法で検証し、一括性を認め得る資料と評価できるのかそうでないのかを決定すべきであることを述べた。これは「小規模遺跡」出土資料の様相を時期区分の参考にする、という意味であったのだが、このことは、循環論的であるが、「小規模遺跡」の評価をおこなうということでもある。

「小規模遺跡」が、考古学的に単一の時間幅で収まるのか、複数の時期にわたって継続するのか、という点からは、おのずと「小規模遺跡」の遺跡としての評価は変わってくるであろう。単一の時間幅なのであれば、短期間のいわゆる「キャンプ」と評価することもできようが、複数の時期にわたって継続するのであれば、単純な「キャンプ」としてだけでは捉えきれない要素を含むこととなる。

後期中葉の遺跡に関しては、「環状盛土遺構」に代表される「拠点集落」を中心とし考察がなされる場合が多く、こうした「小規模遺跡」は「拠点集落」周辺の一時的な集落と捉えられる場合が多からう。しかし「小規模遺跡」の実像は、実際には未だよくわからない。後期中葉の集落間の関係や社会像についてはいくつかのモデルが提出されているが、「小規模遺跡」の評価が可能となれば、より豊かな社会像のモデルが描けるのではなかろうかと愚考する。

文化財行政という観点からも、「拠点集落」=上位の遺跡、「小規模遺跡」=下位の遺跡といった単純な階層化の図式で、遺跡の評価が下されるのは困る。昨今の情勢からすれば、「重要でない」という評価がもたらす弊害は小さくないと思われる。いずれにしろ、これまではあまり注意されなかった「小規模遺跡」の重要性について、もう少し目を向ける必要があるらう。

後期中葉の土器に関しては、すでに多くの先学の論考があり、これらを十分に消化しないまま、書き連ねてしまった。文中敬称は略させていただいた。誤読等があれば、すべて筆者の責である。小文がいたずらに研究史を混乱させただけではないかと危惧する。文中、敬称は略させていただいた。（2004. 8）

謝辞（敬称略）

大谷弘幸，大村 裕，神野 信，小林謙一，建石 徹

註

- (1) 西野 元 1971 『三里塚』 (財)千葉県北総公社
宮 重行・池田大助ほか 1981 『木の根』 (財)千葉県文化財センター
- (2) 鳴田浩司・安井健一 1999 『空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書2 - 山武郡芝山町上宿遺跡・大堀切遺跡』(財)千葉県文化財センター
- (3) 山内清男 1967 『日本先史土器図譜』(再版・合冊) 先史考古学会(1997 再刊 示人社)
- (4) 鈴木正博 1981 「遺物特論Ⅱ - 「加曾利B式(古)研究序説 -」『取手と先史文化 下巻』 取手市教育委員会
- (5) 池上啓介 1937 「千葉県印旛郡臼井町遠部石器時代遺蹟の遺物」史前学雑誌第九卷三号
- (6) 菅谷通保 1996 「南関東東部後期中葉土器群の様相」『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸問題』 縄文セミナーの会
- (7) 林田利之 2004 「条線紋に見る施文規範の踏襲と変化 - 粗製と呼ばれる土器は誰が作ったのか? -」『印旛郡市文化財センター研究紀要3』 (財)印旛郡市文化財センター
- (8) 菅谷通保は加曾利B2式斜線文土器について、「立木段階」から「後田段階」への変遷を想定している(菅谷 注6文献)。林田はこの二つは系譜が異なるとして、これに反対する(林田 注7文献)。筆者自身は、相対的に「後田段階」が後出する可能性はあるが、菅谷の一系的な変遷観には疑問を持つものである。立木例のような鋸歯状の文様が加曾利B2式の古い部分から存在することに異論はないが、この文様は「後田段階」のような手法と併存し、加曾利B3式直前、あるいはそれ以降にも引き継がれる息の長い文様ではないかと考えている。
- 斜線文土器に関しては、林田の言うとおり様々な系譜があるように思える。菅谷が取えて分析からはずした、大宮台地で多く見られる矢羽根状沈線、綾杉状沈線を含めて、系譜と変遷を考える必要があると考えている。
- (9) 小川和博ほか 1995 『中妻貝塚 - 発掘調査報告書 -』 取手市教育委員会
- (10) 市川 修 1976 『小山台貝塚』 図書刊行会
- (11) 大塚達朗 2004 「『の』の字単位紋考 - 加曾利B1式の理解として -」縄文時代15 縄文時代文化研究会
- (12) 大内千年 1994 「第5章土器」『上高津貝塚A地点』 慶應義塾大学文学部民族学・考古学研究室
- (13) 鈴木正博 1978 「加曾利B式土器に於ける微隆帯文土器について」『日本考古学協会昭和53年度総会研究発表要旨』 日本考古学協会
- (14) 菅谷通保ほか 1985 『古作貝塚 - 遺跡確認調査報告 -』 船橋市遺跡調査会
- (15) 鈴木正博ほか 1980 『大田区史(資料編)考古Ⅱ』 大田区史編さん委員会
- (16) 大塚達朗 1983 「縄文時代後期加曾利B式土器の研究(I) - 最近の成果の検討と新たな分析 -」東京大学文学部考古学研究室紀要第2号
- (17) 縄文セミナーの会 1996 『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸問題』
- (18) 鈴木正博 2003 「吉見台から遠部台へ - 地域研究の進展によって姿を現した日本先史土器の新たな段階 -」『新世紀の考古学 - 大塚初重先生喜寿記念論文集 -』 大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会
- (19) 蓼沼香未由 2003 「縄文時代後期加曾利B式土器における入組文の分析」『茨城県考古学協会誌』第15号 茨城県考古学協会

(20) 下総考古学研究会 1998 「<特集>中峠式の再検討」『下総考古学』15

下総考古学研究会 2004 「<特集>房総半島における勝坂式土器の研究」『下総考古学』18

(21) 山本考司 2004 「縄文時代中期編年に関する研究史の断片－「神奈川シンポジウム」を基点として－」『シンポジウム縄文集落研究の新地平3－勝坂から曾利へ－発表要旨』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会

(22) 大内千年 2004 「環状貝塚に関する一視点－流山市三輪野山貝塚の事例から－」『時空を超えた対話－三田の考古学－』慶應義塾大学民族学・考古学研究室

(23) 近年の出土事例としては、(財)千葉県文化財センターが調査し、報告書刊行が予定されている印西市西根遺跡が、加曾利B式のまとまった出土事例として注意されよう。